

イチョウはいつ日本へ到達し、
いつ日本から世界へ広がっていったか？東京大学名誉教授
法政大学名誉教授

長田 敏行

イチョウの精子発見は明治になって最初の大発見であると述べた前稿で、イチョウは1000年ほど前に中国から日本へ来て、日本に広がったと述べた。また、一旦滅びかけたのに、再度世界へ広がっていったとも述べた。しかし、1000年ほど前という曖昧な表現をしたのはなぜか、また、再度世界へ広がって行ったというが、いかにして広がっていったかは、大きな疑問であろうと思う。今回は、そのなぜといかについて紹介したい。

1. 日本へはいつ来たか？

日本に生育しているイチョウの中には樹齢1000年を超えるものがあるといわれ、特に対馬の琴(きん)の大イチョウは1500年に達するといわれる。ところが、問題は、年を経たイチョウは材が腐朽したりしており、正確な年輪が判断できないことである。本州で最も古いといわれるイチョウは、富山県氷見市の上日寺にある雌の大イチョウであるが、伝説によると1200年前に植えられたということであり、実に大きな巨木



図-1 富山県氷見市上日寺のイチョウ
2014年6月に、富山市での学会の折、氷見市まで足を延ばして訪問したが、実に堂々とした雌のイチョウで、周辺には実生が群生していた。

である(図-1)。

ところが、文献上確実にイチョウと判断できるものはずっと時代が下り、室町時代1523年に出された銀閣寺の道具帳である「御飾書(おかざりのしょ)」である。銀閣寺を造営したのは、室町幕府8代將軍足利義政であるが、その時代背景を少し述べる必要がある。元々権力基盤の弱かった足利幕府は、義政の時に

は將軍の継嗣問題、また、將軍を支えるはずの管領にも継嗣問題があり、混迷を極めていた。これは一つには、決断力に欠く義政にその原因があり、さらに正室日野富子の介入もある。その結果、応仁の乱を招くこととなった。しかも、義政は、経済基盤も弱体であるのにもかかわらず、莫大な資金を投じて東山に伽藍群を建造し、その一つの象徴が銀閣寺である。政治向きのことを放置して、禅、茶道、能に没頭したといわれている。その銀閣寺の「御飾書」に、既に様式化した「銀杏口」という花瓶が書かれている。その頃、イチョウの紋章も現れることから、単なる事実の記載ではなく文化的伝統に則った象徴的存在としての登場であるから、相当な歴史的経過を経た結果であると想像される。仮に、1000年前にイチョウが日本に到達したとしたら、それから500年後には高度に様式化して現れるわけであり、その間に文化的蓄積があったのであろう。しかし、その間の空白は一体なんであるかという疑問は、相変わらず残ることになる。

このような空白を部分的に埋めてくれそうなものの一つが、1975年に韓国南岸道徳島付近で発見された「新安沈船」から回収された品々である。まさに、最近セウォール号が沈没した付近である。中に残されていた荷札などから、新安沈船は鎌倉時代末期の1323年に京都五山の一つ東福寺より元に派遣された交易船(図-2)で、その少し前に焼失した東福寺再建目的に遣わされたものであると推定される。この船は浙江省寧波(にんぼう)を出航したのが6月で、台風であったとも考えられる暴風のため沈没して、そのまま時を経て発見されたのであり、回収作業にはほとんど10年の日時を要した。積載されていたものは、2万点を超える景德鎮などで焼かれた中国磁器、香木、金属材料、仏具などであるが、古銭27トンが特に際立っている。その中に薬用の品々もあり、その1点は疑いようもないギンナンであった。ということは、記録にはなくても、イチョウは何度も日本へもたらされたことと推定可能である。実際、各地のイチョウの酵素多型を調べると多様性を示し、最近では遺伝子型でも多様であることが明らかにされている。従って、日本へは何度も持ち込まれ、そ

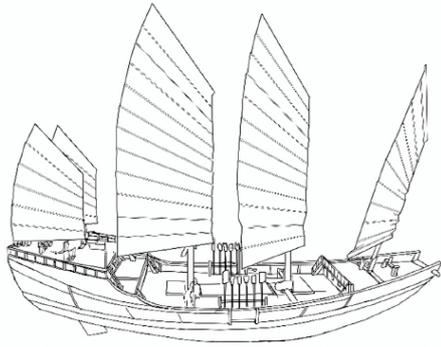


図-2 新安沈船
1323年韓国全羅南道新安郡沖で沈没した、東福寺より派遣された日元貿易船復元図。排水量200トンと推定。(長田敏行著「イチョウの自然誌と文化史」より)



図-3 イチョウの図
1712年ケンペルによりレムゴウで出版された「廻国奇観」に登場するイチョウ図。(長田敏行著「イチョウの自然誌と文化史」より)

れらが各地へ様々に広がっていったと推定することは可能である。

一方、イチョウに関しては各地に弘法大師伝説がある。このことに関しては、名古屋大学名誉教授で、嘗て真言宗智山派の管長でもあった故宮坂宥勝師から、筆者の質問に対して、「空海の招来した物品の中には医薬品が多いので、その中にギンナンがあってもおかしくはないが、記録としては発見されていない」というご返事をいただいた。したがって、空海が持ち込んだ初期の一人であるということもおおいにあり得ることであろうし、遣唐使が持ち込んだことはおおいにあらう。

かくして、九州から本州北部まで各地に1000年を超えるというイチョウの古木があり、ギンナンが各地に産することの説明は可能であるが、具体的に、誰がいつ、どこへという疑問はなお残されているといわねばならない。

2. いかにして世界に広がったか？

この質問にはすぐ答えることができる。日本から持ち出したのは、元禄時代に北ドイツのハンザ都市レムゴウ(Lemgo)生まれのドイツ人ケンペル(Engelbert Kaempfer)である。ケンペルはオランダ東インド会社の医師として1690～1692年に長崎の出島に滞在し、二度いわゆる参府旅行のため江戸へ来ている。そこへ到るまでに彼の経験し、発表されたことは膨大な量がありいずれも興味があるが、ここでは拙書「イチョウの自然誌と文化史」(長田2014)に譲り、直接関係することに留める。ケンペルは、イチョウを初めて科学的に記載したが、帰国後ずいぶん時間が経過して、1712年に発表したラテン語の著書 *Amoenitatum Exoticarum*〔直訳すれば異国の魅力であるが、伝統的に廻国奇観(かいこくきかん)という訳があるので、以下は廻国奇観とする〕においてである。そこには、イチョウが図入りで記載され(図-3)、銀杏という文字が添えられ、Ginkgoという名前が与えられた。これにより、リンネはイチョウに学名 *Ginkgo biloba* L. を与えた。この学名の由来について、私どもは最近論文を書いているので、ご興味のある方はそれを参照されたい

(Nagata *et al.* :Taxon64,131-136, 2015)。ヨーロッパに導入されたのは、ケンペルの帰国後すぐであり、彼の帰国に遅れること2～3年であるといわれている。そして、現存する最も古いものは、ベルギーヘートベツ(Geetbets)のイチョウで、1730年頃に植えられたといわれ、その頃ドイツ、オランダ、イギリス、オーストリアにもイチョウが植えられた。ヨーロッパへ導入されると、生きていた化石として珍重され、またたく間にヨーロッパ中に拡がり、アメリカへも持ち込まれ、世界へ広がって行った。というのもイチョウが化石として、岩石中に見られることはよく知られていたからである。

当初はイチョウが雌雄異株であることは知られていなかったが、雌雄異株であることが発見されたのは、1814年ジュネーブの植物学者デカンドール(A.P. de Candolle)によってである。デカンドールによって雌株と判定されたイチョウの枝は、各地へもたらされ、その枝は雄の木に接ぎ木された。そして、ウィーン大学植物園の雄のイチョウに継がれた雌の枝はたわわにギンナンを付け、それがボン大学へ送られ、1892年のシュトラスブルガー(E. Strasburger)のイチョウの雌樹で雄の花粉が時間をかけて発達していくことの観察の素材となったのである。

一旦滅びかけたイチョウが再度、人の手を介して世界中へ広がって行ったことは、今日世界中で心配されている、種の絶滅に対する一つの指針を示していると考えられる。つまり、自然環境の変化で絶滅に向かった植物種でも、人との共存で復活可能であるということである。すべてに適用できるわけではないかもしれないが、最近その一例が示された。オーストラリア ニュー・サウスウェールズ州の国立公園で1984年に発見されたウォレミ松(*Wollemia nobilis* ナンヨウスギ科)は発見個体数も少なく、そのままでは自然に絶滅することが予測された。それで、現生地を秘匿し、その株を栄養繁殖させて世界中へ配布された。しかも、頒布に際しては株をサザビーズのオークションに出して、対価をかせぎ、それを頒布の費用として用いるというものであった。また、ナショナル・ジオグラフィックもその頒布に協力している。